

【実践研究】

「運動あそび」を通じて身につく「ソーシャルスキル」 に関する調査報告

中村 泰介*・金川 朋子**・中村公美子***
合田 誠**・長谷 秀揮**・高田 昭夫****

キーワード：運動あそび ソーシャルスキル 幼児体育

1. はじめに

昨今の学校教育現場においてはソーシャルスキル教育を導入して、いじめや不登校などのいわゆる学校危機に対する予防対策的な取り組みが多く実践されている。ソーシャルスキルとは、「対人関係を円滑に築き、そして維持するためのすべやコツ」（渡辺，2019）であり、集団、或いは社会のなかで生きていくために必要な術であるといえる。現代社会の流れのなかでは、核家族化や地域での人間関係の希薄化などに加え、コミュニケーションの在り方が様変わりしたこともあって、年齢の枠を超えた他者との交流や人と人とが助け合う場面が身近に少なくなってきたのではないだろうか。幼児期においてはソーシャルスキルを身に着ける土台となる時期ともいわれ、この時期における他者とのかかわりは、特に今後の社会生活を見通したうえで極めて重要であることが多くの先行研究からも指摘されている。

本報告は以上のような問題意識のもと、幼児期の「運動あそび」の活動の中で育まれるソーシャルスキルを、実際の保育現場で展開されている幼児の運動あそびの行動観察を通じた調査結果を報告するものである。具体的には、それぞれの運動あそびの中で確認されたソーシャルスキルを抽出しながら、幼児の活動状況や他者とのかかわり、各運動あそびで獲得されるスキル（行為や行動）と関連づけながら分析及び検討を行った。

*大阪大谷大学

**四條畷学園短期大学

***大阪成蹊大学（非常勤講師）

****大阪総合保育大学

2. 先行研究の検討

従来、ソーシャルスキル教育は発達支援として実施されてきた経緯がある。しかし昨今においては、幼児教育から小学校教育への接続を視野に入れたソーシャルスキルの実践と捉えられ展開されているケースが少なくない。幼稚園や保育園、或いは認定こども園において就学前からの集団生活の中で育まれる他者とかわるためのスキルの実践は、質の高い保育の一貫としても利点があるといわれている（高橋，2008）。

幼児期におけるソーシャルスキルトレーニング（Social Skills Training, SST）或いはソーシャルスキル教育（Social Skills Education, SSE）は、特に保育内容「人間関係」の内容と関連させた内容の研究が見受けられる（清水，2021）。その中でも本田（2018）は、幼児期のソーシャルスキル教育と3法令の中における保育内容の「人間関係」の記述内容を比較検討し、「…（中略）…ソーシャルスキル教育のなかで生じる幼児と保育者の関係性や相互作用は、保育内容の（人間関係）の中でも重要な「体験」、「関係」、「信頼」と関連が深い¹⁾と指摘している。

一方で、幼児期の認知の発達の観点からは、円滑な友達関係を構築していくために必要な指標とされる「社会的視点調整能力（social perspective coordination）」の中において特に3歳～5歳児の幼児期は「自己中心的役割取得」のレベルであり、自分と他者の視点を区別することが難しく、同時に他者の身体的特性を心理面と区別することが難しいとされている（渡辺・小林，2009）。だからこそ、身体を軸にコミュニケーションを図る運動あそびの実践は、その中でさまざまな体験を通じて学ぶというよりはむしろ、他者という存在と他者の感情を「知る」機会として有意義な実践といえるのではないだろうか。

また、実際に獲得されるソーシャルスキルの中でも、「主張スキル」の獲得に関しては、ソーシャルスキル教育実施後の幼児の活動分析からも介入の効果が高いことが報告されている²⁾。ここでの「主張性スキル」とは、「やさしい頼み方」、「上手な断り方」、「自分を大切に作る」スキルとされており、後述する本調査の「仲間づくり」のスキルである「仲間に入る」「あたたかい言葉をかける」、そして「相手に伝える」スキルである「あやまる」、「上手に断る」、「感謝の気持ちを伝える」、「困った時に助けを求める」と類似する。

上記の先行研究からも伺えるように、保幼小連携の視点を重要視する点でも幼児期において、ソーシャルスキルの実践は極めて効果があることが理解できる。しかしながら、とりわけ保育現場において運動あそびとソーシャルスキルを融合させた実践例は皆無に等しい。そこで本研究は、ソーシャルスキルの獲得を積極的に捉えていく運動あそびの実践プログラムの開発にむけて調査研究を実施し、保育者が幼児の運動あそびの活動中に身につけていくソーシャル

スキルを支援しフィードバックできる指標を上記プログラムに導入することを本調査研究の最終目的とした。

3. 本調査研究の意義

なぜ、運動あそびの活動中におけるソーシャルスキルの獲得が有意義なのか、この点について筆者は次のように考える。

幼児期において体を楽しく動かす多様な経験、そして身体活動量の確保という視点は健全な発達発育を促進するうえでは不可欠であるといえる。スポーツ庁（2022）は、特にコロナ禍の影響を受けて子どもの体力の低下がこれまでにはない深刻な状況にある³⁾と報告している。また、スポーツや運動をする子ども、しない子どもがはっきりと分かれてしまっている二極化の現状をみても、体力向上や生活習慣の見直しがこれまで以上に叫ばれることは想像に難くない。

しかしそのような状況だからこそ、幼児期の運動は体力の充実よりも、こころが満たされる経験として、自己或いは他者や環境とのかかわりを重視する必要があると考える。当然のこととして保育で実践されている自己を含めた環境とのかかわりを通じたさまざまな経験が、集団や社会で活動する上で欠くことのできないふるまいや行為の土台となってくる。その中で、幼児期の運動あそびは単に身体を動かす運動という視点だけではなく、様々な葛藤体験が生まれる機会として、他者や自己の気持ちを経験していく運動の場面と捉えることで、幼児期の運動を広義に解釈していくことが重要であると考え。また運動場面だけに止まらず、就学以降の主体的な活動（本調査では「自らの意思決定のもとに物事を判断できる力」⁴⁾）を実現していくうえにおいても、幼児期からのソーシャルスキルトレーニングの実践は極めて意義が大きいといえる。

4. 本調査研究の目的と方法

4-1. 目的

本調査の目的は、集団で展開される運動あそびの活動中に看守されるソーシャルスキルを抽出し、保育の実践の中で積極的にソーシャルスキルを獲得する支援につながるプログラムを作成することにある。

4-2. アンケート調査の方法・実施

後述する調査の予備調査として、運動あそびに内包されるソーシャルスキルを検討するために養成校に所属する学生（70名）と保育者（20名）を対象としたアンケート調査を実施した。

Table 1 調査で用いたソーシャルスキル 16 項目

・子どもが話すスキル	・相手に気持ちを伝えるスキル
・他の人の話を聴くスキル	・困っているときに助けを求めるスキル
・自分の感情を理解するスキル	・やさしく頼むスキル
・自分の感情に対処するスキル	・自分を大切に作るスキル
・他者にあたたかい言葉をかけるスキル	・感謝する(気持ちを行動で伝える)スキル
・仲間に入るスキル	・発表するスキル
・あやまるスキル	・ストレスに対処するスキル
・上手に断るスキル	・立ち止まって考える (「気持ちをコントロール」)スキル

調査内容は以下 (Table1 参照) のソーシャルスキル 16 項目が、幼児の自由あそびや運動あそびの中で経験されるスキルであるか、という簡易な内容のアンケートであった。この 16 項目は小学生のためのソーシャルスキルとして作成されたものであるが、幼児期のソーシャルスキルトレーニングとしても就学以降に向けた「リハーサル」的な機会として効果的である (渡辺・小林, 2009)、という観点を踏まえ、幼児の自由な活動や運動あそびで身につくスキルについての予備調査として実施した。

4-3. アンケートの結果

因子分析の結果、5 因子構造 16 項目であったため、I 自分への気づきとコントロールするスキル (自分の感情を理解する・自分の感情に対処する・上手にことわる・自分を大切に作る・ストレスに対処する・立ち止まって考える (気持ちをコントロールする)、II 相手に伝えるスキル (あやまる・助けを求める・感謝する (気持ちを行動で伝える)・やさしく頼む)・、III 基本的スキル (話す・聴く)、IV 仲間づくりのスキル (あたたかい言葉をかける・仲間に入る)、V 発表するスキル (発表する) と解釈した。回収したデータの統計処理は、アプリケーションソフトウェア SPSS Statistics 2.0 を使用した。

Table2 幼児期の運動あそびとソーシャルスキルの因子分析の結果

	因子				
	1	2	3	4	5
感情を理解する	.552	.178	.419	.277	-.208
感情に対処する	.775	.037	.236	.075	-.061
上手に断る	.590	.366	.152	.024	.137
自分を大切にす	.543	.409	.049	.092	.011
ストレスに対処する	.590	.308	.319	.199	.195
立ち止まり考える(気持ちをコントロールする)	.767	.135	.132	.039	.154
あやまる	.060	.707	.338	-.034	.101
困った時に助けを求める	.214	.622	-.124	.171	.019
やさしく頼む	.336	.541	.347	.336	.080
感謝の気持ちを伝える	.359	.521	.422	-.094	-.212
話す	.190	.319	.639	.001	.016
聴く	.191	-.014	.618	.040	.152
仲間に入る	.075	.022	.000	.757	.070
あたたかい言葉をかける	.216	.129	.617	.642	.112
発表する	.336	.136	.372	.116	.740

4-4. フィールド調査の実施・方法

アンケート調査の結果を踏まえ、実際の保育現場において、運動あそびとソーシャルスキルに関するフィールド調査を下記の要領で実施した。

対象 40人(3歳児、4歳児、5歳児)

調査先 大阪府 T市 P保育園

期間 2021年8月17日～9月18日の間の16時～18時

内容 グラウンドでの運動(自由)遊びの行動観察・記述(研究者2人)
 運動遊びが出現する場面及び活動中のソーシャルスキル獲得の確認作業
 記録をもとに保育者と対話的作業(子どもの理解の視点を共有)
 客観性の担保

4-5. 行動観察の分析

約1カ月間実施した調査において、基本的スキル(話す・聴く)は全ての運動あそびの中で確認された。3歳児の平行あそびでは会話が成立していない場面、つまり一方通行的な会話の場

面が見受けられた。しかしそのことは、かかわる環境との相互作用を経験によって知り、そして他者の存在に気付くという点で、自己の存在へのまなざしとして獲得されていくことに繋がるものと考ええる。

自分への気づきとコントロールするスキル（自分の感情を理解する・自分の感情に対処する・上手にことわる・自分を大切にする・ストレスに対処する・立ち止まって考える（「気持ちをコントロールする」））は、幼児においてさまざまな葛藤体験から身につけていくものと思われる。したがって、自分の感情を理解して折り合いをつけていくことが難しい時期でもあるが、あらゆる状況をリハーサル的な場と捉え、保育者がモデリングとなりふるまいのパターンを示していくことが重要であると考ええる。

相手に伝えるスキル（あやまる・助けを求める・感謝する（気持ちを行動で伝える）・やさしく頼む）においては、仲間とのトラブル時などの問題となる場面での保育者の介入がほとんどであるが、うれしい気持ちや感謝の気持ちをことばや行動で伝えられた際には、褒めることにおいてそのスキルの定着を促すことに繋がると考える。

仲間に入るスキル（あたたかい言葉をかける・仲間に入る）は、集団あそびが展開される活動においては、集団の中に上手く入れない子や、集団から外れてしまう子が生じてくる。この際に、自分への気づきとコントロールするスキルと連動させ、その状況でどのような行動を選択したらよいのか、そしてどのような言葉をかけたらよいのかなど、保育者と一緒に日常的に考えることで、このスキルの定着が図られると考える。

発表するスキルは、ほとんどのあそびの中で確認された（ドッチボールの遊びには確認されなかった）。この発表するスキルとは、人前で何かを披露するなどの発表形態だけではなく、遊びの活動中に「こうするんやで」、「これ、みてみて」といった他者に向けられた表現活動も発表するスキルとして見做している。したがって、この発表するスキルを幼児期に多く経験することは、就学以降の課題の一つでもある自分を他者に知ってもらう「自己紹介」のスキルにも効果的に繋がっていくものと考ええる。

5. おわりに

本報告は幼児期の運動あそびで身につくソーシャルスキルに焦点を当てた調査研究を実施した。それと同時に、運動あそびで身につく運動のスキル獲得への分析の視点も示している（表3参照）。保育内容の健康領域のねらいでもある「健康なこころと体を育む」ためには、こちら側（大人）が子どもの「心と体は一体である」という視点が不可欠である。加えて、行動観察で確認された幼児の運動あそびのなかで培われる身体動作が、小学校の学習指導要領の体育の運動の内容へ[・]_・と接続していく発展性の視点を持つことも重要である。

Table 3 領域別にみた幼児の運動遊びから得られるソーシャルスキル

領域	運動遊びの種類		基本のスキル		自分への気づきまことコントロールするスキル				相手に伝えるスキル				仲間づくりのスキル		実施する	
	内容	運動遊び	話す	聞く	感情を表現する	感情に反応する	上向きになる	自分を見つめる	自分の考えを伝える	相手の気持ちを察する	相手の気持ちを伝える	相手の気持ちを察する	相手の気持ちを伝える	友だちと協力して遊ぶ		仲間に入る
A 体づくりの運動遊び	ア 体ほぐしの運動遊び															
	イ 多様な動きをつくる運動遊び	① 体のバランスをとる運動遊び ② 体を移動する運動遊び ③ 用具を操作する運動遊び ④ 力試しの運動遊び	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	ウ 固定施設を使った運動遊び	木登り	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
B 器械・器具を用いた運動遊び	イ マットを使った運動遊び	ござ転がり	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	ウ 鉄棒を使った運動遊び	木を利用した鉄棒遊び	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	エ 跳び箱を使った運動遊び															
C 走・跳の運動遊び	ア 走の運動遊び	いろんな走り方	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	イ 跳の運動遊び	いろんな跳び方	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
D 水遊び	ア 水の中を移動する運動遊び															
	イ もぐる・浮く運動遊び															
E ゲーム	ア ボールゲーム	ドッチボール	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	イ 鬼遊び	鬼ごっこ・かくれんぼ・ネコとネズミ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
F 表現リズム遊び	ア 表現遊び	プリンセスごっこ・おままごと・馬ごっこ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	イ リズム遊び	昆虫太極拳	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

今後も、他のあそびではなく運動あそびだからこそ経験できるソーシャルスキルに関する調査を継続し、保幼小連携の充実を図るプログラムを考案していきたい。

謝辞

本調査にご協力いただいた園児の皆さん、保育者の方、学生の皆さんに対して、心より感謝申し上げます。

注

- 1) 本田, 2018, p.70.
- 2) 本田, 2018, 同掲書, p 72.
- 3) 令和3年度に報告された運動体力テストは以下のスポーツ庁のHPを参照した。
https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/toukei/chousa04/tairyoku/kekka/k_detail/1421920_00005.htm (閲覧日 2022.11.28)
- 4) 特に、就学以降の10歳ころに対峙する「10歳の壁」と言われる時期の課題に対して、筆者も運動場面において、自己の意思決定に基づく判断や意見を主張する重要性等を提言している(中村ら, 2020)。

【引用・参考文献】

- 1) Frank M.Gresham (2018) Effective Intervention for Social-Emotional Learning, The Guilford Press.
- 2) 本田真大 (2018) ソーシャルスキル教育の観点から保育内容(人間関係)の内容分析. 北海道教育大学紀要(教育科学編)第68巻第2号, pp.65-74.
- 3) 田中裕子 (2013) 日常保育における人間関係を育む事例の検討ーソーシャルスキルトレーニング(SST)の技法を用いてー. 愛知教育大学幼児教育研究第18号, pp.71-78.
- 4) 命婦恭 (2020) 幼児期におけるソーシャルスキルの発達と適応, 西南女学院大学紀要 Vol.24, pp.119-126.
- 5) 高橋雄介・岡田謙介・星野崇宏・安梅勅江 (2008) 就学前児の社会的スキルーコホート研究による因子構造の安定性と予測的妥当性の検討ー. 教育心理学研究, 56, pp.81-92.
- 6) 中村泰介・河合学・中村公美子・松山博明 (2020) 「Emotion based Coaching」の構築に向けた基礎的研究ースポーツ若年層年代選手の「個の強さ」を育成するためのコーチングメソッドー. 笹川スポーツ財団研究成果報告書, pp.179-184.
- 7) 清水陽香 (2021) 国内における幼児を対象としたソーシャルスキルトレーニング研究の動向ー保育内容(人間関係)とのつながりー. 永原学園西九州大学短期大学部紀要, 51, pp.37-42.
- 8) 渡辺弥生・小林朋子 (2009) 10代を育てるソーシャルスキル教育 感情の理解やコントロールに焦点を当てて, 北樹出版.
- 9) 渡辺弥生 (2016) 児童の感情リテラシーの発達: 感情表現に焦点を当てて. 法政大学文学部紀要 73巻.